

半沢幹一教授定年退職記念 特別企画 誌上文芸サロン②

序詞の変質論をめぐって

遠藤 耕太郎

一

序詞は、「和歌・雅文などで、ある語句を引き出すために、音やイメージの上の連想からその前に冠する修辭のこ
とば」（日本国語大辞典第二版）と説明されている。むろん「ある語句」が心情（心象）を形成する主題であり、そ
れを「引き出す……修辭のことば」が序詞である。

すでに『万葉集』で序歌は「寄物陳思」に分類されるが、その分類自体が、歌は心情（心象）を陳べることに、つま
り抒情を旨とするという認識によっており、こういう認識が『歌経標式』や『古今和歌集』仮名序、『新撰髓脳』な
どの歌学書を経て、現在に至っている。

夙に土橋寛（『萬葉』昭和三二年（一九五六）十月、『古代歌謡と儀礼の研究』所収）は、「記紀歌謡まで遡るまで
もなく、萬葉の歌においてすら、序詞は必ずしも本旨に對して從屬的關係にある修飾語とは見られないものがあるこ
とに注意したい」と述べていた。

河上のゆつ岩群に草むさず常にもがもな常処女にて（卷一・二二）

この歌は、十市皇女が壬申の乱後、伊勢神宮に参詣する途次で、吹黄刀自が、波多の横山の巖を見て作った歌という題詞を持つ。「河上のゆつ岩群に草むさず」という巖は、単に心情を陳べるためではなく、その場の（何らかの儀礼をしたのだから）囁目の景物が詠み込まれているというのである。土橋はこうした例を古代歌謡にまで広げ、「序詞は元来、心情の表現形式でもなくて、始めに即興的景物ないし囁目の景物を提示し、それにひっかけて陳思部に転換してゆく発想形式」であると述べる。

その上で土橋は、こうした即興的景物や囁目の景物が、儀礼の場などから自由な宴席の場などに変化してゆくに従って、連想の範囲が自由に広がって一般的な景物へと変化していったのだと述べる。

二

半沢幹一『古代歌謡表現史』は基本的に土橋の序詞の史的展開を踏まえた上で、『万葉集』における序詞の変化を意味への回収、つまり比喩という視点から跡付けようとしたものである。

その第一段階は、序詞に「ある語句を引き出す」手段という機能を与えること、つまり序詞の手段化であると半沢は述べる。

宇治川の瀬々のしき波しくしくに妹は心に乗りにけるかも（卷十一・二四二七）

いざりする海人の梶の音ゆくらかに妹は心に乗りにけるかも（卷十二・三二七四）

いずれも下二句の心象表現「妹は心に乗りにけるかも」は同じであるのに対して、物象表現が異なっている。土橋が想定するように、「場所＋景物」の提示が歌の元来の趣旨であったとすれば、個別の場である物象を提示するのが

本来的なあり方であった。が、それが定型的な心象表現（妹は心に乗りにけるかも）の個別性を個別の物象によって表現することになっている。つまり序詞が心象を表現するために手段化されたということだと半沢は述べる。

さらに次の段階では、序詞が一首全体の意味に取り込まれるようになる。

我が背子に我が恋ふらくは奥山のあしびの花の今盛りなり（巻十・一九〇三）

この歌では、序詞が一首の上の句ではなく第四句に位置しており、すでに自然（物象）を発想の起点とすることはなく、「恋ふ」という人間心象が主語・主題となり、自然物象の序詞表現を、その説明の修飾句として位置付けたものであると半沢は述べる。同様のことは、

石上布留の山なる杉村の思ひ過ぐべき君にあらなくに（巻三・四二二）

などのように、序詞が引き出す語句が序詞に直接続くのではなく、間に別の語句を挟んでいる場合にも言える。序詞はすでに、一首の表現全体から逆算・帰納されるものになっている。

また序詞が一首全体の意味的な統合に回収されるようになると、序詞末の「の」の文法的意味合いが変化するという。

庭つ鳥鷄の垂り尾の乱り尾の長き心も思ほえぬかも（巻七・一四二三）

ふつうは、序詞部分の鶏の尾の長さという空間的な意味と、下の句の待つことの長さという時間的な意味が、格助詞「の」によって比喩的に重ねられると説かれる。だが、格助詞「の」は、それ自体に「比喩性を積極的に示す機能はなく、前後のつながりを無標的に示すだけ」であり、また「連体格、主格という文法機能を表示する格助詞ではあるが、序詞末の用法は、その機能に収まらない」と述べる。これは大事な指摘だ。本来無標的な序詞末の格助詞「の」が、一首全体を意味的に統合するという変化の中で、無標的でありつつも、修飾表現の一つとしての比喩的用法とも解されるようにもなるということである。この第二段階の変質を半沢は意味的関連性の強化と言う。

従来多くの指摘があるように、序詞の変質にもっとも強くかかわったのが人麻呂である。

雲間よりさ渡る月のおほしく相見し児らを見むよしもがも（卷十一・二四五〇）

序詞部に特定の地名を持たず一般的であり、それによって引き出された「おほほしく」との関係は、月が主体となるという意味的關係性による。さらにその関係は月に「児ら」をたとえるという比喩関係になっている。こうした序詞の第三段階の変質を半沢は、比喩化と呼ぶ。そしてその先に、

ひさかたの天照る月の隠りなば何になそへて妹を偲はむ（卷十一・二四六三）

のように、序詞を用いることなく、妹を月にたとえるというメタレベルでの比喩表現が展開される。半沢はこれを序詞の不可能性と呼ぶ。

総じて半沢論は、土橋の序詞の変質論に則りながら、独立的であった序詞が、文法的・意味的に一首全体に統合・

回収されるさまを、手段化、意味的関連性の強化、比喩化という段階として具体的に捉えたものであり、特に序詞末の「の」に表れるように、意味的統合への志向が文法を変化させるほどにまで強まるといふ興味深い指摘がなされている。

三

もともと、半沢の変質論は、序詞の意味的統合への志向を史的に序詞を体系づけければそういう流れが見えるということであって、実際には第一、第二、第三段階の変化の相が同じ空間や同じ時期に重なっている。とすれば、半沢自身が述べるように、変質しても「なお、序詞と呼びうるのはなぜか、あるいは、序詞としなければならないのはなぜか」という問いが大切になってくるはずだ。

半沢はこれを表現形式としての長さや位置、表現内容として物象表現であること、序詞末の「の」に典型的に表れる非文法性として説明する。だが、この問いで私が知りたいのは、序詞が一首全体の意味にからめとられる中で、なぜ序詞を残そうとしたのかという意図にある。

ところで、私がフィールドワークを行なっている中国雲南省西南部に暮らす少数民族、ナシ族の人々は、基本的に文字をもっていないが、豊かな歌掛け文化を維持してきた。麗江付近に暮らす彼らの歌掛け歌には「ゼンジュ」という修辞がたくさんの歌掛け歌に使われる。

サンコウ鳥の尾が長いように、長い間お会いしませんでした。

鳩の尾が円いように、今回仲良くお会いしました。

「長い」と「長い」が同音、「円い」と「仲良く」が同音である。この構造は序詞と同じだ。だが、この歌は個別の儀礼における即興的景物を歌い込んであるわけではない。また、歌い手たちへの聞き書き調査から、前半の自然（物象）と後半の心情（心象）は同時に考えるもので、その際に比喩による意味のつながりと同音による言葉のつながりとの調和を追求するものだとということが分かってきた。（遠藤「東アジアの序詞的発想法」『日本歌謡研究』二〇一四年一二月）

むしろそれには高度な技が必要だが、彼らはそれを書かれた文字を脳内で音声化するのではなく、歌掛けの空間に声として響く音として楽しんでいる。楽しむとは、歌の技を理解できる者同士がそれを交換しあうことで互いに相手を認め、聴衆を含めて共同体の連帯感を感じ取る中に、個別の心情を表現しているということだ。それを媒介するのが声である。すでに声の歌のレベルで音と比喩（意味）の調和が追及されているのである。

『万葉集』の序歌も、特に音調によるものは、その場で歌われたのだろう。と同時に、この時代は歌が文字によって書かれるようになっていく時代でもあった。歌が書かれるという行為の中で、序詞が本来的に目指していた、比喩による意味的なつながりと同音による音声のつらなりの調和のうちの、意味的なつながりに重心がかかっていくことになったのだろう。

しかし彼らは、その空間に響く音によって共有される連帯感の中に個の心情を表現する方法を簡単に手放すことはできなかった。そこに音を再現しようという力が働き、それが序詞末の「の」に端的に表れるように文法をも乗り越えてしまうということになったのではないか。私は今、そんなことを考えている。

（付記） 本稿は、半沢幹一『古代歌謡表現史』（笠間書院・二〇二二年）第一章第四節「序詞表現」を読んでの感想である。序詞に関する拙稿を引用していただき、しかも猷呈の葉に「意見を述べよ」と書かれていながら返信が滞っていてすみません。